

奄然伝および「求法巡礼行」考補遺

山 口 修

一 二世結縁状について

奄然の生涯および入宋の行程については、清涼寺釈迦像の胎内から発見された文書類によって、旧来の諸説が訂正され、新しい史実が明らかになったこと、周知の通りである。このときの調査（昭28）に立ちあわれた塚本善隆先生は、いち早く「清涼寺釈迦像封蔵の東大寺奄然の手印立誓書」を発表され、奄然の生涯および清涼寺の建設に至る過程を、主として胎内文書により跡づけられた。¹⁾

この論文の第一章が「東大寺二学僧の二世結縁状」であり、二世結縁状の全文を掲げられた上、その意義を解明された。しかし当時は、文書そのものが現状のように補修されておらず、きわめて判読しがたい状態にあったと思われる引用された文中に脱字や衍字など二、三の出入が認められる。結縁状の内容についても、読み易い漢文であるため、その大意を略述されるにとどめられた。²⁾

よって正確を期するため、ここに改めて原文書の影印を掲げ、釈文を付しておく。その内容について、仏教学の研

敬啟

十方三世諸佛菩薩禪定神通地祇現當二世結緣此

傳燈法師住齋

天慶元年戊戌三月廿四日誕生俗姓李氏

天德三年五月六日受戒師王寬靜

傳燈法師住齋

天曆四年庚戌七月十五日誕生俗姓李氏

天德二年十月廿二日受戒師王法藏律師僧部

病以五道之中難得者人身人身之中難具者男根縱
得男根遇佛法難也縱遇佛法得出家之難也縱雖出家
為修行僧難也縱雖修行住一伽藍難也難住一處為同
學難也今有然等值暇教以知古迴愚心而思今結緣於智
勝如來說法之場同生於釋迦大師遺教之域即其結緣
之趣具見于化城品又如經文說世尊即為父經法即為母同
學者兄弟因是而得度因茲義感等近始從今生速至于菩

提結緣同意茂善薩滿六度行濟五趣生抑義藏等凡夫
血肉之身感業煩惱未除親疎難定喜怒易變是以十
方三世諸佛國內普天神明為證先一期生間曾不變其
志設遇惡知識令背乖其心常存善知識曾不違失其
界死生同心寒溫相問若平失此結與法之心終共不證無上菩提
是故點定愛宕山同心合力建立一處之伽藍興隆釋迦之遺法
然後弟二生又共生覺摩內院見佛聞法弟三生共隨從旃勒下生
間浮聞法得益深增其薩大悲之心隨願往來十方淨土疾證無上
正等菩提仍錄現當二世結緣狀各持一通將貽將來

天祿三年

歲次

閏二月

日

庚午時

東寺僧義藏

僧有然

究者ならば自明のことではあつても、初心者の間からはしばしば質問を受けることがあるので、余計なこととは十分に承知しながら、釈文中に（ ）をほどこし、文意の解明に資すると共に、若干の解説を加える。

釈文

敬みて啓す、十方三世の諸佛菩薩、梵天諸天、天神地祇に、現當二世結緣狀

傳燈法師位裔然 天慶元年（九三〇）戊戌正月廿四日誕生、俗姓秦氏

天德三年（九五九）五月十八日受戒 師主寬靜

傳燈法師位義藏 天曆四年（九五〇）庚戌七月十五日誕生、俗姓多治氏

天德二年（九五八）十月廿二日受戒、師主 法藏權僧都

竊かに以ふに五道（地獄道・餓鬼道・畜生道・人道・天道）の中、得難き者は人身なり、人身の中、具へ難き者は男根なり、縦へ男根を得るも、佛法に遇ふは難なり、縦へ佛法に遇ふも、出家を得るは之れ難なり、縦へ出家すと雖も、修学僧となるは難なり、縦へ修学すと雖も、一伽藍に住するは難なり、一處に住すと雖も、同学となるは難なり、いま裔然等は、聖教に値ひて以て古を知り、愚心を廻らして今を思ふ、智勝如来（大通智勝如来）の説法の場に結縁し、同じく釈迦大師の遺教の域に生まる、即ち其の結縁の趣は、具さに（法華經第三）化城（喩）品に見ゆ、また經文の説くが如し、世尊は即ち父たり、經法は即ち母たり、同学は兄弟なり、是に因りて得度し、茲に因りて義威等、近きは今生より始め、遠きは菩提に至る、縁を結び意を同じうし、菩提心を発して、六度（布施・持戒・忍辱・定の行を満し、五趣（地獄・餓鬼・畜生・人・天）の生を濟ふ、抑々義藏等は凡夫の血肉の身なり、業に惑ひて煩惱いまだ除かれず、親疎も定め難く、喜怒も変じ易し、是に十方三世の諸佛、国内普天の神明を以て證と為し、先に一期生の間、曾て其の志を変せず、設し悪知識に遇ふも、寧ろ其心を背乖せしめん、常に善知識を存し、曾て其の契を

違失せず、死生にも心を同じうし、寒温にも相問はん、若し卒に此の結縁興法の心を失へば、終に共に無上の菩提を證せざらん、是の故に愛宕山を點定し、心を同じうして力を合せ、一處の伽藍を建立し、釈迦の遺法を興隆せん、然る後に第二世は必ず共に兜率内院に生まれ、佛に見えて法を聞かん、第三世は共に弥勒に隨從して、閻浮に下生し、法を聞きて益を得ん、深く菩薩大悲の心を増し、願に隨ひて十方淨土に往來し、疾く無上正等の菩提を證せん、仍て現當二世の結縁狀を録し、各々一通を持して、まさに將來に貽さんとす、

天祿三年（九七）歲次閏二月三日癸午時

東大寺僧 義藏

僧 齋然

この二世結縁狀の出現により、すでに塚本先生が述べておられたごとく、齋然の素生は「俗姓秦氏と訂正され、その生年月日も受戒の年月日と受戒師主（寬靜）も明瞭に」なったわけである。また結縁狀が、法華經化城喻品をふまえていることも、文意によつて明らかであらう。

化城喻品によれば、無量無辺不可思議の阿僧祇劫の昔、大通智勝如來があらわれ、出家して長い長い修行の後、ついに悟りを開き、如來となつた。その間に十六人の王子たちが生まれている。この王子たちをはじめ、あまたの沙門や婆羅門は、世尊に對し偈をもつて讚じた上、法輪を轉じ、苦惱する衆生を度うために、涅槃道を開示せんことを懇願した。よつて世尊は即時に三たび、十二行の法輪を轉じ、つぎのように說法するところがあつた。

是れ苦なり、是れ苦の集なり、是れ苦の滅なり、是れ苦の滅の道なり、

さらに広く十二因縁の法を説いた。十六王子は出家して沙弥となり、また世尊は二万劫を過ぎた後、妙法蓮華の教えを説いたという。十六の沙弥は、世尊が經を説き、八方四千劫をへて、寂然と禪定した後、おのおの法座に昇り、また八万四千劫において、ひろく妙法蓮華經を説き明かした。十六の沙弥は十方の国土において、現在も說法する。み

な佛となつたが、その第九は西方にあって阿弥陀と名づけ、第十六は釈迦牟尼佛であり、婆娑国土において完全な悟りに達した。こうした教説にしたがつて、齋然と義蔵は、今後の生涯を共に歩まんことを誓ひ、愛宕山のふもとに一処の伽藍を建立することを念じたのであつた。

二 「巡礼行」補訂

さて齋然の入宋に関しては、同じく釈迦像の胎内より発見された文書を基本とし、この紀要創刊号に「齋然入宋求法巡礼行並瑞像造立記」考なる小論を寄稿し、文書の影印と翻字および釈文を掲げた上、巡礼の行程などについて些か私見を述べるところがあつた。しかし右の小論のなかでは、疑問として保留した箇所があり、また文中の誤りを先輩や知友から指摘された。よつて、このたび本誌に寄稿をゆるされた機会を利用し、補遺の形を以て、さきの小論に訂正を加える。なお本文および注に掲げたページ数は、創刊号におけるページ数を示している。⁽⁸⁾

さき的小論において疑問として残したところは、原文「渡石梁。瞻四果之真居。」とあり（P. 4 及 P. 11）、この文中「四果之真居」とついで、⁽⁹⁾「解釈不能」と述べた（P. 21）。石梁とは、天台山における石梁飛瀑を意味することは、改めて論ずるまでもない。ところで『高僧伝一』の伝えるところによれば、古く晋代の初め、中天竺のナランダー寺で修行した白道猷（曇猷）は、五臺山を経て天台山に詣り、石梁を渡つて、親しく五百羅漢の応現に見えたという。すなわち石梁の地は、古くから五百羅漢応身のところと伝えられてきたのであつた。⁽¹⁰⁾東晋の孫綽も『天台山賦』のなかで、天台山について、「皆玄聖之所遊化、靈仙之所窟宅」と述べ、さらに石梁については「応真飛錫以躡虛」と謳っている。応身とは、五百羅漢を意味すること、いうまでもない。

石梁のかたわらには石梁寺が建てられ、広大道場とも呼ばれて、のちに道猷尊者の影像等身が安置され、さらに五百羅漢像が祀られるに至った。⁽⁹⁾この石梁寺は、やがて方広寺と改称され、さらに上・中・下の三伽藍が造営された。かつての石梁寺のあとを襲ったのは上方広寺であつたと考えられるが、颶風のために倒壊し、いまは跡をとどめるのみである。そして石梁を見下す位置に中方広寺があり、石梁を見上げる箇所下方広寺が建てられて、共に現存している。往時は五百羅漢像を安置していたが、かの文化大革命の時期に、堂宇の一部と羅漢像は破却せられた。その後復興が進められ、一昨年^(一九八二)に再訪したときには、五百羅漢像もみごとに新しく造作されていた。

このように歴史をたどつてみたとき、齋然が「四果の真居を瞻^{みあひ}た」箇所は、往時の石梁寺の一角であつたことは、疑いなくところであろう。

すなわち「四果」とは、声聞乘における聖果の差別のうち、第四果にあたる阿羅漢果を示したものと考えられる。その「真居」とは、五百羅漢の応身のところ、と伝えられた石梁にはかならない。⁽¹⁰⁾

また、さきの小論で執筆にあたつて杜撰に見すごした点が間々あり、自ら愧じている。釈文においても、五台山の巡礼を終つた直後、文書の原文に「其何郷国須還」とあるところ(P. 6)を「其れ何ぞ郷国に還るべけん」と解説し(P. 13)、さらに「いまや直ちに郷国に帰るべきではない」と説明した(P. 28)。この点に関し、尊敬する学友から「郷」は「郷」に通じ、すなわち「向う」意味ではないかと指摘された。そのように解すれば「其れ何ぞ国に郷^{むかひ}ひて還るを須^またん」ということになるであろう。これならば説明の文意にも通じるわけである。

さらに齋然が再び国都の開封に至り、それから台州への帰途につくとき、開封から台州までは三、四日で達する^{と述べている}(P. 30)が、これは明らかに私の迂闊な誤りである。往路には十月八日に天台山を発し、開封には十二月十九日に達することができた。その間に二カ月余を要している。尤も途中にあつて諸寺を巡拝しているから、

実際の行路のみに要した日数は短縮されるであろうが、帰途には天台山に登らなかったにしても、さらに南方の台州まで三、四日で達し得るとは、とうてい考えられない。何ゆえに、かかる叙述をなしたのか。私自身が不明である。実際の日程は、文書によって確かめることができないから、この文は削除することに致したい。

そのほか校正ミスと考えられる箇所が幾つか存する。いちいち、この本文で挙げることは煩わしいので、注記において訂正を施すことを宥恕せられたい。

註

(1) 『仏教文化研究』第四号。昭和29年刊。のち『塚本善隆著作集』第七巻に所収。

(2) 右の論文において、塚本先生が示された大意の文は、つぎの通りである。

天禄三年（九七二）閏二月二日、午前をもつて、東大寺の二学僧齋然（三十五歳）、義藏（二十三歳）は、十方三世諸仏菩薩乃至天神地祇の前に現在世未來世にわたる誓願を立てて、同志結縁の証書に連署して手印をおして一通ずつを分ち所持した。二人は、生れ難き人に生れ、男子に生れ、仏教にあい、出家をとげ、学僧となり、東大寺の如き大寺に住み而も同学となった因縁を喜び、世尊を父とし経法を母とする兄弟として、煩惱未断の凡夫にして、親疎喜怒の心定め難きものながら、ここに仏神の証明の下に一生この契をかえず、同志相助けて興法を誓った。曰く愛宕山に同心合力して一伽藍を建立して釈迦の遺法を興隆し、第二生には共に兜率天の弥勒仏のもとに生れて見仏聞法をとげ、第三生には弥勒の下生に随つてこの世界に生れて無上菩提を証得せんと。

(3) このたびの補遺として示した小論は本来、第二号に掲げるべく準備していた。しかるに一昨年の秋、天台山を再訪した後、不慮の病患が発見され、入院をして手術ということになったため、発表が遅れてしまった次第である。小論の刊行後、直ちに誤りを指摘して下さった諸賢に対し、深くおわび申上げたい。

(4) このところは、さきの小論においても注記している（P.35）。

(5) 成尋の『参天台五臺山記』延久四年（一〇七二）五月十八日の条に曰く。

……溪行して石橋に至る。広大道場あり、先づ白道猷尊者の影像等身、金色堂の三面に十六羅漢の画像を懸くるを拝し、焼香礼拝す、道猷尊者は第三果（阿那含果）の人、曩に晋初……来りて石橋を過ぎ、五百大阿羅漢に親見し、礼拝供養す、尊者の形象を安置し奉る所以なり、……次いで石橋に参ず……公家、毎年、五百羅漢を供養する舎なり、先づ山に向ひて礼拝焼香し、五百羅漢を供養す、次いで橋頭に至り、焼香礼拝す、……

(6) さきの小論においては、いわゆる四向四果の意ではないであろうと述べた（P. 21）が、ここに訂正する。なお注記においては、五百羅漢にまつることであろうかと記していた（P. 35）。

(7) 翻字の文中（P. 8、第11行上部）に「休輪廻[＊]拾」とあるは「休輪廻[＊]於」の誤り。

釈文の註記のうち（P. 12、下段）「くやうやし[＊]くつしむ」は「うやうやし[＊]く……」のミス。

三、巡礼の行程の文中（P. 22、後から4行目）は「新昌[＊]県」のミス。

同じく（P. 28、後から7行目）「旅[＊]県も想えられて」は「整えられて」のミス。